

SR500

1978年 / 市販車

日本では1970年の大阪万博を機に、高度経済成長の恩恵を受けつつも、オイルショックや公害問題など、解決すべき課題も数多く存在していた。米国も経済的に不安定であった一方、AMAの最年少チャンピオンとなったケニーロバーツにより、ダートトラックレースへの人気が高まっていった時期でもある。これをヒントとしてXT500のエンジンを流用した、ビッグシングルスポーツが企画された。垂直OHVを様式とする英国製単気筒に対し、前傾OHCのビッグシングルとティアドロップ型燃料タンクの組み合わせはSR独自の様式であった。空冷4ストロークSOHC2バルブ単気筒499ccのエンジンで、最高出力32ps/6,500r/minのスペック。排気量違いのSR400は2021年の生産終了までの間、排ガス規制などによる数々の存続の危機を乗り越えた。特にSRの後継機種としてSRXの企画が立ち上がった1980年代初頭、一旦はSRの生産中止が決定されたが、改めて審議の結果『SRブランド』と呼べるデザインが再評価され、SRXと並行販売へと方針転換された。結果としてSRX以上の43年に渡る超ロングセラーモデルとなり、12万台以上が生産された。

